

静岡音楽館倶楽部情報誌

December 2006
No.44

AOI通信

C O N C E R T H A L L S H I Z U O K A

音——静かに、優しく、空から降ってくる。

対談
堀米ゆず子&湯浅譲二

この一冊『イノック・アーデン』

コンサートシリーズ2007

AOI Information

「静岡の名手たち」…いま、そしてこれから…

レビュー: **AOI・レジデンス・クワルテット**

I N D E X



C O N C E R T H A L L S H I Z U O K A

ここに響く

静岡音楽館



〒420-8691 静岡市葵区黒金町1番地の9 TEL (054) 251-2200

E-mail: info@aol.shizuoka-city.or.jp URL: <http://www.aol.shizuoka-city.or.jp>

湯浅譲二

(作曲家)

堀米ゆず子

(ヴァイオリニスト)

対談

11月19日、都内ホテルラウンジにて、ヴァイオリニスト・堀米ゆず子さん、作曲家・湯浅譲二さんをお招きし、3月9日に開かれるコンサートへの意気込みや、今回初演となる湯浅さんの新曲《芭蕉の句による四つの心象風景》などについて、お伺いしました。

湯浅:お久しぶりです。サントリーホール10周年の時《イン・メモリー・オブ武満徹》というコンチェルトを弾いて頂いてからずいぶん経ちますね。

堀米:ちょうど10年です。あの時お腹にいた子がもう10歳になりました(写真を出す)。

湯浅:そうそう、臨月でハラハラして…、かわいらしいお子さんですね。

堀米:コンサートの当日に生まれてしまうかもしれないというスリル満点の公演でした。

湯浅:当初武満が書く予定だったヴァイオリン協奏曲ですが、彼が病氣療養に専念するからといって私が引き継いだものの、亡くなってしまって…。だから、編成はヴァイオリン協奏曲でも、自分としてはヴァイオリンとオーケストラを使って彼を偲ぶという形になりました。

堀米:確かに武満さんのオマージュではありますが、

私はちょうど新しい生命が生まれる時だったので、とても悲しいのだけれど、それだけではない、ホール全体があたたかい気に満ち、浄化されたような不思議な感じもありました。

湯浅:僕は自分の感情を作品に出すことはしないんです。しかし、どうしたって書いている最中に彼のことを思い出すんですよ。そうすると自分が意図しなくてもそのことが作品に表れてしまいましたね。リハーサルで実際の音になったのを聴いてそう思いました。

堀米:譜面をいただいて音の並びを見たときに、なんて綺麗で色彩的なんだろうと感じました。

一つ一つの音が本当に美しく、組織的に選ばれた音だとは感じさせないものがありました。

湯浅:私はいつも今までにないものをという姿勢で作曲してきました。この作品は、十二音^{*1}のモードで



書かれています。音が近いところから遠いところへと遠ざかる部分や下行する音程の繰り返しには、悲しみや無常観が表れているように思います。激しい部分もありますよ。それなのに、気付かないうちに(感情が)放出されている部分がある。これはインスピレーション以外のなものでもなく、自分にとっても初めての経験でした。

本当のことをいうと、私はヴァイオリンがあまり好きではないのです。

一同:えーっ、

湯浅:だってヴァイオリンの音は高くてヒステリックでしょ。ヴィオラのほうがずっと官能的で豊かな音色です。ところが、堀米さんのヴァイオリンは本当に素晴らしい。僕は普通のクラシックのコンサートにあまり出掛けないのですが、堀米さんがエリーザベト王妃国際音楽コンクールで優勝された後の東京文化会館でのコンサートに行ってなんて素敵な演奏なんだろうと…。



堀米:ありがとうございます。確かにあの作品もヴァイオリンでは高い音ではない、A線^{*2}からでしたよね。それからフラジレット^{*3}が本当に美しいんです。

湯浅:そう。フラジレットは音が高いというだけでなく、美しい音色です。あの作品には、特に難しい技法は使ってないですよ。

堀米:ええっ! 高音での持続音はけっこう大変ですよ。

湯浅:私は、ヴァイオリンは全然弾けないし、分からないから書いたんですよ(笑)。

堀米:でもそんなことは思わせないくらい、音が良く

出て楽器が鳴るように書かれた作品だと思います。
湯浅:そうですか? 今回の作品はどうでしょう? 弾きにくいなんて思われちゃわないかな。

—— 湯浅先生はヴァイオリンとピアノという編成の作品を書かれるのは今回が初めてというのがとても意外なのですが…。

湯浅:いわゆるスタンダードの組み合わせはとても難しいので、自ら進んで書いてきませんでしたが、今回はすばらしい二人の演奏家が弾いてくれるというので引き受けました。だからといって今さらソナタでもないし、先人が作り上げた既に確立している形式では書きたくないと思っています。

僕の作品には二種類あります。題名があって言葉で説明ができるもの、例えば、芭蕉の句を題材に用い、表現した作品。それから、プロジェクションという作品群のように音楽的・音響的な意味しか持たず、全く言葉では説明できないもの、つまり時間・空間の両方の意味で構造的な作品があります。

世の風潮として標題音楽に比べ絶対音楽のほうが勝っているとしたしばしば言われますが、その位置づけは全然納得できるものではありません。音楽で表現できるものは人間のもっている様々なもので、本当に幅広くあると思います。



堀米:私もそう思いますね。絶対音楽と標題音楽のどちらかが勝っているなんていえないと思います。ベートヴェンの音楽は絶対音楽の典型のように

言われていますが、即興的な和声の移り変わりもあるし、モーツァルトの即興的な音楽はいつ聴いても、今作られた音楽のように感じさせる新鮮さがあります。

先生はモーツァルトはお好きですか?

湯浅:モーツァルトは大嫌いでした(笑)。僕はバッハが一番好きです。その絶対音楽、構成は本当に素晴らしいですよ。子供の頃、僕の家にはレコードが沢山あって、ヴェルディやヴァーグナー、チャイコフスキー、グリーグから多く影響を受けました。大人になりかけたころにはモーツァルトのその天才ぶりにびっくりしました(笑)。モーツァルトの作品は、良くも悪くも差があります。

—— ヴァイオリン・ソナタも差がありますか?

堀米:ヴァイオリン・ソナタも確かに差はありますね。私の最も好きなヴァイオリニストでシャンドルベーク氏がモーツァルトの三要素を挙げていますが、Cantabile、Grazioso、Risolutoの三つです。1小節の中でも本当にこの三つがころころと変わっていくところなんかは素晴らしいです。

湯浅:そう、モーツァルトはハッと驚くくらい素晴らしく即興的なところが突然現れ、それは天才・インスピレーションの賜物だと思います。

堀米:湯浅先生の作品もそうですよ。

湯浅:ありがとう。確かに、自分の作品を振り返ってみて、自分でどうしてこの音になったのか、と説明できるものよりも、どうやってこうなったんだろう、説明できない、つまりインスピレーションで、というほうが自分でも感動するんですよ。

堀米:今回はどういった内容の作品なのか大変楽しみです。

湯浅:《芭蕉の句による四つの心象風景》という題名で、芭蕉が四季を詠んだ句からそれぞれ一句ずつ選びました。春「ほろほろと山吹ちるか瀧の音」。夏「夏草や兵どもが夢の跡」。秋「菊の香や奈良」。

には古き仏たち」。冬「^ろ艫の^{はらわた}声波を打って腸凍る夜や涙」。

——これらの句はどうやって選んだのですか？

湯浅:一つの季節に対して二、三句候補がありその中から最終的に選びました。芭蕉は、擬声語「オノマトペ」を最初に使った俳人だったと思います。当時としては新しい手法をやったのけたのでしょ

うね。
堀米:春の題材「ほろほろ……」という句にもそのオノマトペは現れていますね。譜面を見る前に、作曲家からこういった作品に関するお話を聞けるということは大変ありがたいです。曲のイメージが膨らみ、どんな作品と出逢えるのか大変楽しみです。

——堀米さんの演奏は毎回大変素晴らしく感じるのですが、そのひらめきというのは突然降りてきたり、引き寄せたりするものなんですか？

堀米:いえいえ、ひらめきを待っているのではなく、毎日新鮮な気持ちで練習しているうちに、もしかしたら? と思ってやってみる中から得られたり、自分の

方向性に引っ掛ったりしたものを集積してできるとい

う感じでしょうか。それは毎回違いますし、誤解を招くかもしれませんが、演奏も構築、つまり造っていくものなんです。毎回ひらめいているわけじゃないですよ(笑)。

湯浅:作曲も同じです。常に自分の中にあるものなんです

ですね。
堀米:湯浅先生の作品も、最初に弾いた時と、二回目に弾いた時では違いますし、毎回面白くて仕方がないです。

——ところで、今回の作品はどのくらい出来上がっているのでしょうか。

湯浅:いえいえ、忙しくてまだ取り掛かっていません(苦笑)。12月中旬ごろには取り掛かる予定です。
堀米:早く譜面が欲しいですね(笑)。前日には湯浅先生立会いの下、AOIでリハーサルができるそうですね。響きの素晴らしさが評判のホールで、この新しく生まれたばかりの曲をどのように奏でたらよいのかと今から楽しみです。

2006年11月19日／ホテルパシフィック東京にて
取材・編集:静岡音楽館AOI大坂ゆう子、千葉真友子



- *1.1オクターブの中に存在する12の音すべてに平等の位置を与えて作曲する技法。
- *2.ヴァイオリンの4本の弦は、低い音から G(ソ)、D(レ)、A(ラ)、E(ミ)と調弦されます。
- *3.弦楽器の特殊な奏法で、ふつうの音と異なる透明な音色

CONCERT INFORMATION

ヨーロッパを中心に世界のトップ・オーケストラと共演を重ねるヴァイオリニスト&ピアニスト

堀米ゆず子&児玉桃
デュオ・コンサート



19:00 開演 (18:30 開場)
全指定¥4,000 [会員¥3,600]
堀米ゆず子 (ヴァイオリン)
児玉桃 (ピアノ)
W.A.モーツァルト:ヴァイオリン・ソナタ
第40番 変ロ長調 K.454
第42番 イ長調 K.526
湯浅譲二:芭蕉の句による四つの心象風景
(委嘱作品・世界初演)
C.Dビュッシー:ヴァイオリン・ソナタ

講座

「堀米ゆず子&児玉桃 デュオ・コンサート」をより楽しむために、事前にお話を聞いてみませんか。

講演会
「湯浅譲二 自作を語る」

2/7(水) 19:00 講堂(7F) ¥500
(3/9のコンサートのチケットをお持ちのかたは無料)要申込

3/9の「堀米ゆず子&児玉桃
デュオ・コンサート」で新作を発表する作曲家・湯浅譲二が、その新作を中心に自己の音楽観などを語ります。





道下 匡子 (作家・翻訳家)

蘇るメロドラマ（ピアノ伴奏付き朗読）

アルフレッド・ロード・テニスン 詩、リヒャルト・シュトラウス 作曲



岩波文庫 入江直祐 訳

私がこれまで敬遠してきた詩の翻訳に挑戦してみようと一念発起した第一の理由は、それが敬愛するふたりの友、吉行和子と高橋アキのためだったからです。そして翻訳を依頼された、イギリスのヴィクトリア時代の桂冠詩人、アルフレッド・ロード・テニスン（1809-1892）の代表作のひとつで、今なお世界中の人々に広く読み継がれている長篇詩『イノック・アーデン』（1864年刊）の純粋で豊穡な世界に心を打たれたからです。

また、7、80年前に先人のなされた貴重な翻訳は、当時の状況を鑑みて、並外れたご努力と能力の賜物と、深い畏敬の念を感じつつ拝読しましたが、物語の筋は伝わっても、聞こえてくるのは、テニスンの選び抜かれた、簡潔で、みずみずしい言葉がつくり出す香り高く、崇高で、甘美な世界とは別のものでした。私が無謀にも、『イノック・アーデン』の新訳に挑戦したのはそれが最も大きな理由です。私の耳が、頭が聞いたテニスンの言葉の響きを、私の能力の及ぶ限り、それにいちばん近いかたちの日本語に移し替えること。そのことに微力とはいえ、全力をそそいだつもりです。

『イノック・アーデン』は、そそり立つ崖が海岸線を覆うイギリスの小さな港町を背景に、肉体も精神もおそろしく強靱な船乗りのイノックと、裕福で心やさしい粉屋のフィリップ、それにこのふたりの男に同時に愛される美しく清らかなアニーをめぐる物語です。イノックはアニーを娶り、子供を3人もうけますが、イノックは家族のために一攫千金を求めて、中国行きの商船に乗り、難船して南洋の孤島に打ち上げられ、長い孤独の歳月を送った後、奇蹟的に懐かしい故郷に戻ってきます。だが、そこで彼を待っていたのは……?!

物語の骨格は、当時の実話をもとにしたといわれていますが、岩に砕ける白い波、谷間の黄色い砂浜、ハシバミの森、霧に包まれた荒れ果てた牧草地など、臨場感あふる自然描写のすばらしさや、人の悲しみや喜びや不安、野心、信仰心、死の恐れ、そして悟りなど、さまざまな人間の心の原型を瞬時に切り取り、短い言葉に約めてみせる、言葉の包丁さばきの見事さは、まさにテニスンの真骨頂といえるでしょう。

はじめはマッチョの典型ともいえるイノックが、最期には、愛するアニーの幸せを願って、自分はそっと消えて行くという、この冒険/純愛物語は、私たちに愛の本質について考えさせます。支配欲をもたず、忍耐強く人間的なフィリップ、愛するひとを最後の最後まで裏切らないアニー。私たちはこの3人の人生を通して、人が生きていく上で直面するいくつかの根元的、普遍的な問題をふたたび考えることになるでしょう。

リヒャルト・シュトラウスがこの作品のために作曲した、心に響く美しいピアノ伴奏付きのこの画期的な試みは、道下匡子による新訳『イノック・アーデン』をベースに、朗読を吉行和子、ピアノは高橋アキという、今の日本で考えうる最適、最強の組み合わせで実現することになりました。その長いキャリアを通して、常に自らの能力の限界に挑戦し、それぞれの世界で新境地を切り拓いてきた彼女たちのつくりあげるテニスンの荒々しくもピュアで甘美な幽玄の世界。私も観客のひとりとして、今からその日を胸をわくわくさせて待っています。

3/15(木) 19:00
吉行和子・高橋アキ
音楽と言葉の織りなす物語
サティのスナップショットとR.シュトラウスのメロドラマ

2007年1月から3月までの、静岡音楽館AOIが
お届けする5つのコンサートをご紹介します。

まず、1月13日 **シリーズ・若い翼 山田晃子**の**室内楽**。当音楽館では常に音楽の魂を熱く
伝える若い演奏家たちに、場を提供したいと思っ
ています。今回は、ロン＝ティボーやミュンヘン国
際コンクール、そしてその後世界中での活躍が始
まっている若きヴァイオリニスト、山田晃子さん
をお迎えし、彼女を中心とした極上の室内楽をお届
けします。脇を固めるのは、ヴィオラの今井信子さ
んと、チェロの原田禎夫氏。いずれも世界的に活
躍するソリストであり、欧米の室内楽シーンに欠か
せない室内楽の達人です。それに当館芸術監督
の私が加わり、モーツァルト、シューマン、ブラーム
スのいずれも魅力あふれる室内楽作品をお楽し
みいただきます。

次に1月21日の **ニューイヤー・オペラ・コ**
ンサート《椿姫》。昨年「コシ・ファン・トゥッ
テ」に続く、当館企画会議委員・池田直樹の構成・



**ここが
聴き逃せない。**
 コンサートシリーズ 2007の魅力。
 野平一郎 (作曲家、ピアニスト、静岡音楽館AOI芸術監督)

演出による静岡音楽館サイズのオペラ。今年は
オペラの中のオペラ、ヴェルディの大傑作をお届
けします。劇場、そして歌というものを知り尽くした
作曲家が描く「永遠の愛の物語」を、森朱実、井
ノ上吏吏をはじめ、現在日本で考えられるベストの
キャストでお贈りします。きっと皆さんは日常から
解放され、この素晴らしい歌い手たちが伝える物
語に涙を流されることでしょう。



続いて、2月10日 **レ・ヴァン・フランセ**。この
五重奏団の名称には、フランスの木管楽器、とフ
ランスの風、という二重の意味がかけられています。
その名の通り、フランスは過去に数々の名演奏家
を生み出してきた木管楽器の本場。フルートのパ
ュー、クラリネットのメイエ、オーボエのルルー他、
といった正にフランスのエスプリを伝える世界最
高の木管奏者たちが、日本初演を含む興味深い
プログラムを聴かせてくれます。

3月9日は、**堀米ゆず子&児玉桃デュオ**の
コンサート。世界的に活躍するこの2人による、
モーツァルトを中心とした二重奏。彼女たちが全

曲演奏してきたモーツァルトのヴァイオリン・ソナ
タの中から、その最も素晴らしいエッセンスを披露
してくれます。さらに、日本を代表する作曲家、湯
浅譲二に当館が委嘱した新作初演があります。
10年前、武満徹が作曲することになっていて果た
せなかった「ヴァイオリン協奏曲」、それを完成さ
せた湯浅譲二の名曲の初演を名演奏で飾ったの
が堀米さんでした。その影りの深い素晴らしい
ヴァイオリンの音色は、皆さんの心をつかんで放
さないでしょう。

シーズン最後は、3月15日 **吉行和子・高橋**
アキ 音楽と言葉の織りなす物語です。
正にコンサートのタイトル通り、サティとリヒャルト・
シュトラウスという全くスタイルの異なった、語りと
音楽がコラボレーションする2つの作品に当館企
画委員の高橋アキさんが挑みます。おそらく女性
としてはじめてR.シュトラウスの「イノック・アーデン」
の語りに挑戦するのは、あの女優・吉行和子さん。
またサティの「スポーツと気晴らし」は、「ク・ナウカ」
の宮城聡さんの演出と2人の語り手による演奏で
す。音楽と語りが一体となった素晴らしい舞台に、
是非ご期待ください。

いずれも、音楽の魔性を伝える静岡音楽館だ
けのオリジナルなプログラム。どこでも同じお仕着
せのプログラムが横行する昨今の日本の音楽界。
しかし静岡は一味もふた味も違います。どこへ
行っても、こんなコンサートは聴けません。皆さん
のご来場をぜひお待ちしております！

「静岡の名手たち」…いま、そしてこれから…



第1回合格者(1995年度)
松谷 卓
 (作・編曲家、ピアニスト)

まず「静岡の名手たち」からAOIでリサイタルの機会を得
られた事をいまでもとても感謝しています。その後の音楽
活動のきっかけにもなり、高校を卒業と同時に音楽活動を
始めました。1999年にオリジナル曲による1st Albumを発
表し、これ迄に舞台やCMやTV番組の音楽、映画音楽
等を創ってきました。代表作は、「大改造!! 劇的ビフォーア

フター」の挿入曲や「スーパーJチャンネル」のテーマ曲、
映画「いま、会いにゆきます」「タッチ」「県庁の星」のサウ
ンドトラックなどがあります。また、2003年からはLive image
にも参加し、Live活動も徐々に展開しています。来年は、
新作のオリジナルアルバムと共に、僕自身のLiveツアーも
展開して行く予定です。

静岡音楽館 AOI-2007

ここに響く CONCERT HALL SHIZUOKA コンサートシリーズ ― 芸術監督:野平一郎

好評発売中

2007

1/13 土
18:00, ¥4,000
[会員 ¥3,600]

16歳でロン=ティボー国際コンクールにて
史上最年少優勝!

シリーズ・若い翼 山田晃子の室内楽

今井信子、原田禎夫、野平一郎

1/21 日
15:00, ¥5,000
[会員 ¥4,500]

ニューイヤール・オペラ・コンサート 椿姫

2/10 土
18:00, ¥5,000
[会員 ¥4,500]

驚異の木管アンサンブル

レ・ヴァン・フランセ

残券僅少

3/9 金
19:00, ¥4,000
[会員 ¥3,600]

ヨーロッパを中心に世界のトップ・オーケストラと
共演を重ねるヴァイオリニスト&ピアニスト

堀米ゆず子&児玉桃

デュオ・コンサート

3/15 木
19:00, ¥4,000
[会員 ¥3,600]

吉行和子・高橋アキ

音楽と言葉の織りなす物語

サティのスナップショットとR.シュトラウスのメロドラマ

3/10(土)より発売 会員優先発売 3/3(土)～9(金)

5/23 水
19:00

銘器ストラディヴァリで奏でるオール・ブラームス

ギル・シャム ヴァイオリン・リサイタル

6/1 金
19:00

切れば血の出るような恋の歌

演劇的組歌曲《悲歌集》

6/14 木
19:00

ブラヴォー・アンコール!

N響首席奏者たちによる室内楽

6/26 火
19:00

アメリカを聴くⅠ / オーケストラを聴こう

日本フィルハーモニー交響楽団

※会場:静岡市民文化会館・中ホール

7/14 土
18:00

アメリカを聴くⅡ

ニューヨーク・フィル・ブラス・クインテット

※5月以降のコンサートの詳細は、次回のAOI通信でご紹介いたします。
コンサート情報については静岡音楽館AOIまでお問い合わせください。



山田晃子



吉行和子



高橋アキ

大学生以下
(28歳以下)
¥1,000

静岡音楽館倶楽部 会員募集中!

静岡音楽館倶楽部では随時、会員を募集しています。
AOIが主催するコンサートのチケットの優先・10%割引や
特別コンサートへのご招待、などのうれしい特典付き。
(年会費¥2,000) ※詳しくはホームページをご覧ください。

お問合せ / 静岡音楽館倶楽部事務局
TEL.054-251-2200

静岡音楽館倶楽部
会員特別コンサートの
お知らせ

「楽器の女王」とよばれる
ハープの第一人者、
吉野直子さんによる待望のリサイタル。

吉野直子
ハープ・リサイタル
2/2(金) 19:00 開演

静岡音楽館倶楽部 会員は入場無料! お申込み不要!
(会員の方にはチケットをご郵送いたします) 会員でない方も
¥2,000(平成19年度会費)でお聴きいただけます。

J.S. バッハ: パルティータ第1番 変ロ長調 BWV825
A. ジョリヴェ: ハープのための前奏曲
C. ドビュッシー: 月の光
G. フォーレ: 即興曲 op.86 ほか

日本が誇るハープの国際スター。世界的なオーケストラ、指揮者、
奏者と共演、世界の主要音楽祭への参加など華やかに活躍。
リサイタルも多く、1994年、ヴァチカンのシステリーナ礼拝堂での修
復記念コンサートは大きな注目を集めた。2003年よりアバドの呼
びかけによって世界トップ・クラスのソリスト達で結成されたルツェ
ルン・フェスティヴァル・オーケストラにも参加。
91年文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、ほか受賞多数。
<http://www.naokoyoshino.com>



Encre!

[AOIのコンサートで演奏された
アンコール曲を紹介します]

6 /18 [日] 風とあそぼう
久石譲: もののけ姫
S. ライヒ: クラッピンング・ミュージック

10/27 [金] ルノー&ゴッティエ・カブソン
G.F. ヘンデル: 組曲第7番 ト短調 HWV432 より
〈パッサカリヤ〉(J. ハルホルセン 編)
E. シュールホフ: 二重奏曲 より

11 / 7 [火] アリオン・パロック・オーケストラ
G.F. ヘンデル:
歌劇《リナルド》HWV7a より
〈貴方の顔には優雅さが戯れ〉

11/12 [日] AOI・レジデンス・クワルテット
R. シューマン: 弦楽四重奏曲第3番
op.41-3 より 第2楽章

Re view

吉川和夫(作曲家)

● レビュー: 11/12(日) AOI・レジデンス・クワルテット

I. ストラヴィンスキー: コンチェルティーノ G. フォーレ: 弦楽四重奏曲 永短調 op.121
R. シューマン: 弦楽四重奏曲第3番 イ長調 op.41-3

私たちは、演劇を「観に」、音楽会を「聴きに」行く。けれども、演劇のセリフは「聴いて」いるのだし、音楽会場には「観る」楽しみもある。演奏者たちだって「見られている」ことを了解しているから、「ステージマナー」ということばもある。自宅でディスクを聴いているだけでは、音楽を「観る」楽しみは得られない。そして、音楽についていろいろなことを「考える」のもまた、演奏会に出かけることで得られる楽しみのひとつだ。

ストラヴィンスキー「コンチェルティーノ」の楽譜には、とても細かくボーイング(弓の上げ下げ)が書き込まれている。通常作曲家は、必要以上にボーイングを指定することはない。もちろん、弓がアップなのかダウンなのかは演奏者にとっては重要な問題だから、曲想と弾きやすさとの折り合いをつけながら、演奏者自身が決めていくのである。ストラヴィンスキーが細かく指定したボーイングに従えば、この曲の演奏にはどのようなしぐさが必要なのか必然的に決まってくる。そして、そんなしぐさ、身体運動が生み出す音楽はどのようなものなのか、これはやはり演奏を「観て」いなければわからない。

優れた生演奏の舞台からは、さまざまな風が吹いてくる。その風はいろいろな作用をする。つらい思いをしている人を励ましたり、ザラザラした気分を落ち着かせたり。日々の暮らしを潤し、時には疲れている人を眠らせる。そしてその風はまた、さまざまなことを「考え」させてくれる。

フォーレの「弦楽四重奏曲」。大仰な身振りなどなくひたすら率直に、歓喜も寂寥感も、信仰さえも音

楽の中に抽象化され、生きるということは恩寵に満ちた素晴らしいものであり、命とはこんなにもいとおしく輝いているものなのだと、そして音楽とはこのように何者をも語り尽くすことができるものなのだと、フォーレの絶筆はつづやく。

シューマンは、3曲の「弦楽四重奏曲」で、古典的フォルムとロマンティズムを融合させようとした。二ヶ月足らずの間に、熱に浮かされたように書き続けられた12の楽章。その最も充実した成果が第3番だ。第4楽章の民族舞曲調でその集中力と熱気は沸点に達する。言いたいことが山のようにあって抑えきれない、シューマンのそんなエトスがめまぐるしく変化する曲想に映しだされていく。

11月12日、AOI・レジデンス・クワルテットの演奏会を聴く。メンバーはいずれも優れて個性的なソリストたちでありながら、4人の個性はこのクワルテットの個性に無理なく溶け込んでいる。彼らの音楽は馥郁とした香りを放ちながらも、清々しく純粹である。ストラヴィンスキーの現代性、フォーレの情趣に富んだ境地、シューマンの次々と湧きだしてくるロマンティックな心情……とてもバランスの良いプログラミングであり、どの曲も集中度の高い充実した演奏だった。音楽を「聴く」、「観る」、そして舞台からの風を受けながら「考える」楽しみを存分にもたらしてくれる素敵なおクワルテットが静岡音楽館AOIにあることを、私たちはもっと自慢して良い。

※吉川和夫氏のブログでも、AOI・レジデンス・クワルテット及び10月27日、カブソン・デュオ・コンサートについて読むことができます。
<http://kichikic2.cocolog-nifty.com/>「文化・芸術」のカテゴリーから。

AOIのラジオファンが
増えています。

静岡音楽館AOIクラシック・ギャラリー

K-MIX(静岡79.2MHz、浜松78.4MHz)
毎週日曜日 17:55~18:00

コンサートシリーズで演奏される曲を
ちよつとだけご紹介。
コンサートへの楽しみがますますUP。



8Fバーカウンターで
ワンショット!

AOI主催コンサートでは、会員の方に
8Fバーカウンターにてグラスワインを
サービスさせて頂いております。ぜひ、
サービスチケットをご利用ください。

株式会社 **サンタモン** コーポレーション

静岡音楽館倶楽部法人会員(2006年11月末日現在)

かわした歯科クリニック/コカ・コーラ セントラル ジャパン(株)静岡支店
(株)サンタモンコーポレーション/静岡ガス(株)音楽部
静岡ターミナルホテル(株)/鍼灸・指圧 六番町ぬちぐすい/(株)タミヤ
(株)竹酔/三菱電機(株)静岡製作所(50音順)

わたしたちは静岡音楽館AOI「コンサートシリーズ」を応援しています。

静清信用金庫

TOKAI

スター精密株式会社

コンサートの思い出・ご感想などをお寄せください。AOI通信にてご紹介させていただきます。

PRINTED WITH
SOY INK

R100